

# 平成20年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 マガレイ

学名 *Pleuronectes herzensteini*

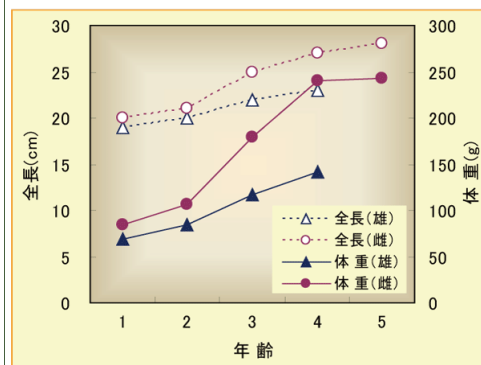
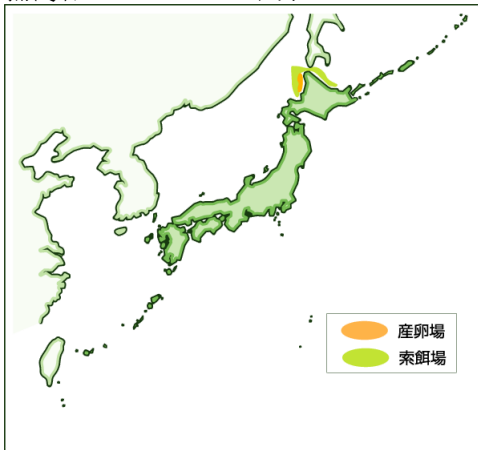
系群名 北海道北部系群

担当水研 北海道区水産研究所



## 生物学的特性

寿命: 雄10歳、雌12歳  
成熟開始年齢: 雄1歳、雌2歳  
産卵期・産卵場: 4～6月、苫前沖～利尻・礼文島周辺海域  
索餌期・索餌場: 北海道の日本海側～オホーツク海側の沿岸  
食性: 仔魚はカイアシ類、未成魚と成魚はゴカイ類、二枚貝類、ヨコエビ類、クモヒトデ類  
捕食者: 不明

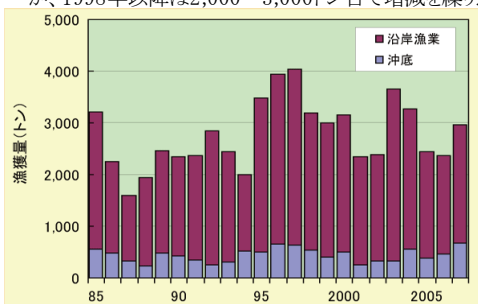


## 漁業の特徴

マガレイ北海道北部系群は、主に刺し網漁業によって漁獲されており、日本海における主漁期は10～6月で、オホーツク海における主漁期は5～12月である。また、日本海側では主に成魚が漁獲されるのに対し、オホーツク海側では主に未成魚が漁獲されるが、漁獲量は日本海側で多い。

## 漁獲の動向

沖合底びき網漁業(沖底)の漁獲量は、1983年以降1,000トン未満で推移しており、2007年は666トンであった。沿岸漁業の漁獲量は、1988年以降増加傾向を示したが、1998年以降は概ね2,000～3,500トンの間で増減を繰り返しながら推移しており、2007年は2,299トンであった。沖底と沿岸漁業を合わせた漁獲量も、1988年以降増加傾向を示したが、1998年以降は2,000～3,000トン台で増減を繰り返しながら推移しており、2007年は2,965トンであった。

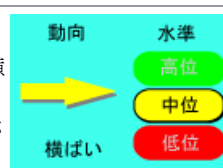


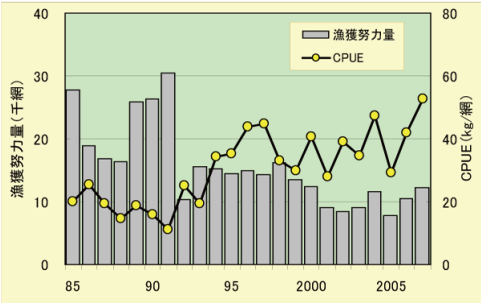
## 資源評価法

CPUEは沖底についてのみ算出可能であるが、沖底の漁獲量は全漁獲量の2割程度であることや、沖底の漁場は沿岸漁業の漁場を含む全漁場を覆いきれておらず、漁獲物体長組成にも違いが見られることなどから、沖底のCPUEを本系群全体の資源量の指標とすることは妥当ではないと推察されるため、漁獲量を基に資源状態を判断した。なお、北海道立水産試験場(北水試)は、本系群についてコホート解析による資源量推定や幼魚調査を実施しているため、それらの結果も参考とした。

## 資源状態

過去23年間(1985～2007年)における漁獲量の平均値を50とすると、2007年の漁獲量は54に相当するため、資源水準は中位と判断した(低位:～30、中位:30～70、高位:70～)。また、漁獲量は近年減少が続いていたが、2007年には増加したため、資源動向は横ばいと判断した。なお、北水試が推定した資源尾数は、1995漁期年(7月1日～翌年の6月30日)以降減少傾向を示していたが、2005および2006漁期年には2年連続で増加した。これは、北水試が実施した幼魚調査の結果から、2004年級群と2005年級群の豊度が比較的高かったためと考えられる。





管理方策

資源状態は中位で横ばいと判断され、また、近年は良い加入状況下にあると考えられるため、現状の漁獲量を継続しても、資源水準が低位になる可能性は低いと推測される。よって、現状の漁獲量を継続することにより、現在の資源水準(中位)を維持することを管理目標とした。過去5年間(2003～2007年)の平均漁獲量をABClimitとし、それよりやや少ない不確実性を見込んだ漁獲量をABCtargetとした。

|           | 2009年漁獲量 | 管理基準        | F値 | 漁獲割合 |
|-----------|----------|-------------|----|------|
| ABClimit  | 2,900トン  | Cave5-yr    | —  | —    |
| ABCtarget | 2,300トン  | 0.8Cave5-yr | —  | —    |

資源評価のまとめ

- 漁獲量を基に資源状態を判断
- 資源水準は中位、動向は横ばい
- 2004年級群と2005年級群の豊度が比較的高い

管理方策のまとめ

- 近年は良い加入状況下にある
- 現状の漁獲量を継続しても、資源水準が低位になる可能性は低いと推測
- 現状の漁獲量を継続することにより、現在の資源水準を維持することを目標としてABCを算定

資源評価は毎年更新されます。